

まえがき

この論集は2007年8月4～5日に北海道大学スラブ研究センターで行われた研究会『スラブ・ユーラシア文化研究会：共産圏の日常生活』（主催：21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」／科学研究費基盤研究A「スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム」）の成果の記録です。

われわれの研究会の趣旨は、ソ連を中心とした20世紀の共産圏（ソ連・東欧・中国）のイデオロギー、政策、国際情勢などの巨視的な問題を念頭に置きつつ、そこに生きた人々の視線、等身大の生活に近づいて、その様々な日常生活を分析することによって、共産体制と個人、公と私、イデオロギーとアイデンティティの相関関係を検討するというものでした。研究会の趣意書には以下のようなメッセージが書かれています。

「日常生活」とは急激な変革とは相容れない、連続性・不変性を特徴とする領域であり、それゆえに、個や集団のアイデンティティが体现される重要な場となる。このような日常生活は、ポスト共産主義世界の主要な研究対象のひとつになっている。その研究の軌道をかかなり大雑把に辿れば、グラスノスチ以降の自分史・家族史の語りに始まり、その少し後に盛んに議論された「記憶の歴史学」の文脈にも重ねられ、現在は共産圏に生きる主体の意識の問題と絡め合わせて論じられている。

ソ連崩壊前後の日常生活研究は、一枚岩の全体主義的イデオロギーを持った体制＝共産社会という神話を完全に破壊した。その根底には、共産社会には様々なアイデンティティを保持しようとした個人や集団の生活空間、「日常生活」があり、それが共産主義体制と対峙する形で存在したという暗黙の了解が存在した。ここから誕生してきたのが「抵抗する主体」の神話である。しかしこの神話もまた、近年の一連のスターリニズム研究が、権力・イデオロギーによって構築される存在としての主体（「人はスターリニズムの外部にいない」）を指摘したことによって、その確実性を失おうとしている。つまり現在の日常生活研究は、「過度な全体主義モデル」を指定することも、それゆえに生まれる「抵抗する主体の神話」を描くことも疑問視する。

しかし、とりわけ革命の熱狂が過ぎた後の共産圏において、このことはどこまで妥当性を持っているのだろうか。先行研究は、スターリン時代のロシアに主な重点を置いて分析している。あるいは例えば、個人主義を排し、集団の幸福のために戦う英雄を称えるロシア的な「滅私奉公」の道徳、ソ連における私生活＝日常の軽視を指摘する。スターリン以降の共産圏に分析の重点を置き、かつ地域的にも、広く旧ソ連、東欧、中国にまで対象を広げて日常生活を取り上げることで、本研究会は共産圏のイデオロギーと個々のアイデンティティ、公と私の関係性を再考することを試みたい。さらにこのことは、共産圏で展開した日常のあり方の共通点と相違を考えることにも繋がるだろう。

「共産」体制はどの程度までしたたかだった（である）のか？ したたかだった（である）のはむしろ「日常」ではないのか？それぞれの研究対象が営んだ日常生活をミクロに捉える視線を集めることで、この大きな問題を複眼的に検討したいと考える。

多少物々しい問題提起ですが、ここには現代の目から改めて 20 世紀の共産主義社会のリアリティを推測し、その意味を考え直してみたいという願いがこめられています。われわれの趣旨はロシア・ソ連研究者だけではなく、中国文化の研究者にも受け止められ、巻末のプログラムにあるように、楽しい中国セクションを含んで専門的にも多岐にわたる、大きな研究会となりました。北海道大学文学研究科の武田雅哉教授には、組織の過程で大変お世話になりました。

この成果集によってわれわれの議論が改めて広い読者の皆様の目に触れ、20 世紀文化論への刺激となれば、これに勝る喜びはありません。

研究会組織・編集担当

望月 哲男

高橋沙奈美